

離穢土欣求浄土（生死の報をかるしめる）、仏意にかなう心であり、外相とは、三業による実践、止悪修善、専ら弥陀を念じ礼すること、また念仏一行に励むことである。

四、内外相応が理想であるが、とくに内心を重視する。

五、内心の二特徴は、深心・廻向発願心に付合する。即ち、「厭穢欣浄」は廻向発願心に、「仏意にかなう心」は深心に付合する。

これは法然の「至誠心は深心と廻向発願心とを体とする」（往生大要鈔）昭法全、五二頁）に一致する。

六、また真実心には二面があるようである。一つは文字通り真実の心、煩惱のない心、自力にて煩惱を断じた心ともいえる心。二つには煩惱具足の凡夫の持ちうる真実心である。善導の主張される至誠心〓真実心は表面的には前者の如く見えるが、その真意は後者にあると法然は受けとっておられるようである。

注

(注1) 「三部経大意」にはAからGまであげて「此外多クノ積有リ。頗フル我等カ分ニコエタリ」。(昭法全、三四頁)とある。これなども、至誠心が凡夫の行とは程遠いものと一応考えられることを示すものである。こうした認識は、後にも触れる如く、「至誠心」を理解する一つの過程として押えておく必要がある。

(注2) 石井教道『選択集全講』三五五頁。

(注3) 藤堂恭俊「法然上人の至誠心釈」『仏教文化研究』二十一号、九五―九六頁参照。

(注4) 藤堂恭俊、前掲論文、一〇五頁。

(注5) 決疑鈔卷三、(浄全、七一―七四頁)。

(注6) 石井教道、前掲書、三五四頁。

(注7) 「三部経大意」(昭法全、三四頁)参照。

(注8) 『唯信鈔文意』では、「外ニ賢善精進ノ相ヲ現スルコトヲエサレ、ウチニ虚仮ヲイタケレハナリ」と読んでいる。

(注9) 藤堂恭俊、前掲論文、一二二―一二三頁。石井教道『選択集全講』(四四―四一頁)には簡単に「翻外内蓄」「翻内播外」を共に内外を逆にして、内なるものを外に、外なるものを内にすればよいとしている。

(注10) 藤堂恭俊、前掲論文、一二二頁参照。

(注11) 服部正穩『法然浄土教思想』(百華苑、昭和五五年)五五頁参照。

(注12) ここにおける「コエタリ」の部分は建長本では「コタエタリ」(但し、コタのタは塗抹)となっている。もしもこの部分を「コタエタリ」と読めば、「コエタリ」とは反対の意味になる。すなわち、それは、菩薩の真実心がワレワレ(凡夫)の至誠心ということになる。しかしこれは以下に論証される如く誤りである。故に、ここでは「コエタリ」と読むのが正しい。

であるといっている。だから自他の諸悪をすてて三界六道を毀厭するのは惣の意（自力の至誠心）であると法然はいつている。

さてこの「煩惱」と真実心の問題を考えると、三心は「念仏」と「諸行」両方に通ずるものであり、さらにこの「念仏」と「諸行」に通ずることは四修においても見えることとし、煩惱具足の凡夫の行が肯定されてくる点をあげている。

② 四修—無間修

『往生礼讃』の無間修の文をあげて、そこには「念仏」と「余行」の二面に関する積がなされていることを指摘している。すなわち、『礼讃』の、

相続シテ恭敬礼拝シ称名讚歎シ、憶念觀察シ廻向發願シテ、心ニ相続シテ余業ヲ以テキタシ、ヘタテスカルカユエニ無間修トナツク。

は、「貪瞋等ヲハイハス余行ヲモテキタシヘタテサル無間修ナリ」とし、また『礼讃』の、

貪瞋煩惱ヲ以テ、キタシヘタテス、随テ犯セルハ随テ懺シテ、念ヲ隔テ時ヲ隔テ日ヲ隔テス、常ニ清淨ナラシムルヲ無間修ト名ツク。

の文をあげ、これは「行ノ正雜ライワス、貪瞋等ノ煩惱ヲ以テキタシヘタテサル無間修ナリ」としている。前者は貪瞋煩惱をいわず余行によってさまたげられない無間修であり、後者は正雜の行をいわず貪瞋煩惱によってさまたげられない無間修である。ここにおいて

注意すべきは前者の無間修説である。ここでは余行を否定するが貪瞋煩惱は否定されていない。

さらに法語には続いて、専雜二行の得失についての『礼讃』の文が引用されている。ここでの主張の中心は、たとえ貪瞋があるうとなかろうと、間断なく念仏相続すれば、本願によって往生決定するという点である。貪瞋煩惱を嫌うのは余行雑行においてであって、念仏行においていわれるものではないとされたのである。

③ 二河白道説

さらにこの点を強調するために、第三として「廻向發願心」積に出ている二河白道の譬を出している。

廻向發願ノ積ハ水火ノ二河ノタトヒヲヒキテ、愛欲瞋恚ツネニヤキ、ツネニウルホシテ止事ナケレトモ深心ノ白道タユルコトナケレハ、ムマル、コトヲウトイヘリ、

ここでも貪瞋煩惱をもった凡夫が肯定されている。

むすび

一、法然は善導の至誠心義を継承しているが、とくにAとC、即ち至誠心の本質と内外相応という具体的な点に大きな関心を払っていた。このことは法然の至誠心積を知る上でも重要なことである。

二、至誠心とは真実心である。

三、真実心とは、これを内外両面から見ると、まず内心とは、厭

3、至誠心積への過程

善導の至誠心積を見ると少くとも表面的には貪瞋煩惱のない、菩薩の真実心である。しかし法然の至誠心は凡夫の持ちうる真実心であった。ではどのようにしてその結論に法然は達せられたのであるうか。それを追求するよき手がかりとして、「三部経大意」または「三部経釈」がある。これには現在四つの写本がある。

建長本 建長六年（金沢文庫所蔵）「三部経大意」

正嘉本 正嘉二年（高田専修寺所蔵）「三部経大意」

元亨本 元亨元年（円智開版）「三部経釈」

正徳本 正徳五年（義山開版）「三部経釈」

この中、元亨本には、

善導和尚釈し給はく、至といは真なり、誠といは実なり。一切衆生の身口意業に修するところの解行かならず真実心のなかなになすべき事をあかさんとす。ほかに賢善精進の相を現してうちに虚仮をいたく事をえされといえるその解行といは罪悪生死の凡夫弥陀の本願によりて十声一声決定してむまると真実にさとりて行するこれなり。ほかには本願を信する相を現しうちには疑心をいたくこれは不真実の心なり。

（昭法全、三三三頁）

とだけ示されているが、建長本と正嘉本にはこのような「解行」の解釈にいたった過程が述べられているようである。

とくに正嘉本では先の元亨本の文をあげた後、続いて善導の釈文（真実心とは貪瞋煩惱を含むものではなく菩薩の真実心である）をあげた後、「スコブルワレラカ分ニコエタリ」（昭法全、三四頁参照）と述べている。これは善導の至誠心を文字通りに理解したとき、法然自身はとてもそのような至誠心を持ちえないものであることを表明したものである。それはこの至誠心が菩薩の至誠心であって、凡夫の至誠心ではないからである。そこで法然はさらにこの至誠心の真意を追究された。そして善導の他の言葉によって至誠心についての独自の意味を開顕された。それは大体三つに別けて考えられる。

①『観経疏』玄義分序題の定散弘の説

正嘉本（建長本も同様）では、

タ、シコノ至誠心ハヒロク定善散善弘願の三門ニワタリ積セリ。といひ、さらにこれを惣別に分け、

惣トイフハ自力ヲモテ定散等ヲ修シ往生ヲネカフ至誠心也。別トイフハ他力ニ乗シテ往生ヲネカフ至誠心ナリ。

と示し、その理由として『観経疏』玄義分序題の文をあげ、その後、

自力ヲ廻シテ他力ニ乗スルコトヲ明スモノカ、
としている。すなわち、自力から他力に移行することを示している。そしてこうした他力の観点からすれば、先の善導の文にある「解行」は「罪悪生死」の凡夫「弥陀の本願に乗して十声一声に決定して生るべしと真実にさとりて行する」ことになるとしている。

善導は貪瞋煩惱を持ったものの業は、雑毒の善であり、虚仮の行

現われた賢善精進を内心に展開充実させれば、それは出離の要道となるのである。また「内懐虚仮」について、内が虚仮で外が真実だという点も、「もしそれ内を翻じて外に播さばまた出要に足りぬべし」と述べている。内心の虚仮を外に掃き出して一掃すれば出離の要道となるのである。もつとも内心の虚仮を一掃しただけでは、内心に真実を実らせることにはならないが、これは先の「翻外内蓄」を前提すれば可能なことである。^(注9)

また「翻外内蓄」ということからいえば、外相に愚悪懈怠をもつもの（四句中第三の人）は真実の行者とは云えないのではないかという問題が出て来る。^(注10) すなわち外相の愚悪懈怠を内心に実らせるということになれば、そのような内心をもつた人は真実の行者とはいえないからである。しかしこれもこの「翻外内蓄」という考えは『選択集』における外相賢善精進内心愚悪懈怠に適用されたものであって、四句の説に適用されたものでないことを知ればよいのである。四句の説では「翻外内蓄」の考えが論じられているのではなく、外相より内心の重要な点が強調されているのである。

以上においてとくに内外の関係において至誠心を見て来たのであるが、この他にも至誠心（真実心）に関する言葉があるので、以下にあげよう。

至誠心トイフハ、余仏を礼セス、弥陀ヲ礼シ余行ヲ修セス、弥陀ヲ念シテ、モハラニシテモハラナラシムル也。

〔念仏大意〕。同、四〇九頁

この至誠心を熾盛心と心えて、勇猛強盛の心をおこすを至誠心と申すは、此積の心にはたかふ也。文字もかはり、心もかはりたるものを、さればとてその猛利の心はすべて至誠心をそむくと申にはあらず、それは至誠心のうゑの熾盛心にてこそあれ、真実の至誠心を地にて熾盛なるはすくれ、熾盛ならぬはおとるにてある也。

〔往生大要鈔〕。同、五二頁

「七箇条の起請文」では、すでに示した如く、虚仮心は煩惱心によるものであることを示し、しかも貪瞋癡それぞれに認められる種類と認められない種類をあげ、その結論において、

詮するところ、生死の報をかるしめ、念仏の一行をはけむかゆへに真実とはいふ也。

〔同、八〇九頁〕

と示している。

「念仏往生義」では「真実の心なり。往生をねがひ念仏を修せんにも心のそこより、おもひたちて行するを、至誠心といふ。」

〔同、六九〇頁〕

と示し、続いて内外相応の心を説き、また「有為無常のありさまを思いしりて、この身をいとひ念仏を修すれば、自然に至誠心をは具する也。」と示している。

〔往生大要鈔〕同、五四頁

一には外相は貴けにして、内心は貴からぬ人あり。

二には外相も内心も、ともに貴からぬ人あり。

三には外相は貴けもなくして内心貴き人あり。

四には外相も内心もともに貴き人あり。

四人が中にはさきの二人はいまきらふところの至誠心かけたる人也。これを虚仮の人となつくへし。のちの二人は至誠心具したる

人也。これを真実の行者となつくへし。〔御消息〕同、五七九頁

これらによれば、内外共に真実であることが望ましいが、しかし同時に外相は内心に比べれば、その重要性が低いという点も指摘される。さらにこのことについては、この二法語及びその他に具体的に説かれている。

しかればたゞ外相の賢愚善悪をば多らばず内心の邪正迷悟によるべき也。〔往生大要鈔〕同、五四頁

されは詮するところは、たゞ内心にま事の心をおこして、外相はよくもあれ、あしくもあれ、とてもかくともあるへきにやとおほへ候也。おほかたこの世をいとはん事も、極楽をねかはん事も、人目はかりをおもはて、まことの心をおこすへきにて候也。これを至誠心と申候也。〔御消息〕同、五七九頁

た、詮するところは、まめやかにほとけの御心になはん事をお

もひて、うちにま事をおこして、外相をは機嫌にしたかふへき也。機嫌にしたかふかよき事なればとて、やかに内心のま事もやふる、までふるまは、又至誠心かけたる心になりぬへし。たゞ、うち心のま事にて、ほかをはとてもかくともあるへき也。かるかゆへに至誠心となつく。〔浄土宗略抄〕同、五九四頁

〔三心義〕には、修業の折には、たとひ外は愚悪懈怠であつても、内心が賢善精進であればよいと示されてある。

ほかに愚悪懈怠のかたちをあらはして、うちには賢善精進のおもひに住してこれを修行するもの、一時一念なりとも、その行むなからず、かならず往生をう、これを至誠心となづく。

〔同、四五五頁〕

このような外相の虚仮性はそれ自体（外相の虚仮性そのもの）を強調せんとするためのものでなく、外相はともかく内心の真实性を強調せんがためのものである。先の「浄土宗略抄」に示される如く、外相は機嫌にしたかうといつても、内心を破るが如きものであつてはならないのである。かくの如く外相の虚仮性を認めるとしても、そこには自から限界のあることを知らなければならぬ。

『選択集』ではこの内外関係から虚仮心の問題をとりあげ、それが「出要の道」となる場合のことを示している。外に賢善精進の相を現し、内に愚悪懈怠の心を懐けば虚仮となるが、「もしそれ外を翻して内に蓄えば、まことに出要に備うべし」と述べている。外に

三頁参照)『選択集』(同、三三三頁及び「観経釈」(同、一二六頁)にもこの問題が論じられているが、これを図示すれば次の如くである。

内 癡 愚 悪 懈怠 虚 仮
外 智 賢 善 精進 実 真

また「七箇条の起請文」には虚仮心は煩惱心であると示している。

虚仮というのは、貪慎等の煩惱をおこして正念をうしなふを虚仮心と釈する也。(同、八〇八頁)

これは『観経疏』の「貪瞋邪偽奸詐百端して悪性侵め難く、事蛇蝎に同じきは、三業を起すといえども、名づけて雑毒の善となし、また虚仮の行と名づけ、真実の業と名づけざる也。」の文と関連があると思われる。

「三心義」には、

ほかに賢善精進の相を現じ、うちには愚悪懈怠の心をいだきて修業するところの行業は、日夜十二時にひまなくこれを行ずれども往生をえず (同、四五五頁)

とあり、「要義問答」にも、

ホカニ賢善精進ノ相ヲ現シテ、ウチニ虚仮ライタクモノハ、日夜十二時ニツトメ、オコナフコト、カウヘノ火ヲハラフカコトクニスレトモ、往生ヲエストイフ。(同、六二〇頁)

とある。これは『観経疏』にある雑毒の善、虚仮の行による安心起行であつては、

たとひ身心を苦勵して日夜十二時、急に走り急に作すこと、頭燃

を炙ふが如くなるも、すべて雑毒の善と名づく、この雑毒の行を廻してかの仏の浄土に生ぜんことを求めんと欲するものは、これ必ず不可也。

という文に、深い関連があると思われる。

◎ 真実

以上で虚仮について見たので、次に真実について考察してみよう。真実は虚仮の反対である。「往生大要鈔」には「真実は虚仮に對することば也、真と仮と對し、虚と実と對するゆへなり。」(同、五四頁)とある。(『選択集』同、三三三頁参照) 真実についてはすでに最初にあげたが、さらにこれに関連する法語があるので以下にあげる。まず「大胡太郎実秀につかはす御返事」には、内外共にかざらぬ心を用いて次の如く示している。

内ニモ、外ニモ、タタアルママニテ、カサルココロナキヲ、至誠心トハナツケタルニコソ候メ (同、五一六頁)

「往生大要鈔」と「御消息」には四句の差別をあげ、虚仮の行者と真実の行者を示している。

- 一にはほかをかざりてうちにはむなしき人、
 - 二には外をもかざらずうちをもむなしき人、
 - 三にはほかはむなく見えてうちはまことある人、
 - 四にはほかにもまことをあらはし、うちにもまことある人、
- かくのごときの四人のなかには、前の二人をばともに虚仮の行者といふべし。後の二人をばともに真実の行者といふべし。

穢土をもちとひ、浄土をもねかひ、悪をもとめ、善をも修して、まめやかに仏の意にかなはん事をおもふを、真実とは申也。

(往生大要鈔)、同、五四頁)

はじめに至誠心といふは真実心也と釈するは、内外と、のほれる心也。何事をするにも、ま事しき心なくては、成する事なし。人なみく心の心もちて、穢土のいとはしからぬをねかふ気色をして、内外ととのほらぬをきらひて、ま事の心さしをもて、穢土をもいとひ浄土をもねかへとおしふる也。

(十二箇条の問答)、同、六七六頁)

身に礼拝を行じ、くちに名号をとなへ、心に相好をおもふ、みな真実をもちひよ。すべてこれをいふに、穢土をいとひ浄土をねかひて、もろくの行業を修せんもの、みな真実をもてつとむべし。

(三心義)、同、四五五頁)

以上、法然の法語から至誠心||真実心を要約すると、

- ①身口意の三業に行ずるところ、みな誠の心をもつこと。
 - ②うちをむなしく、外をかざる心なきこと。
 - ③まことに穢土を厭い、浄土を欣うに内外相応すること。
 - ④止悪修善と仏意にかなう心。
- ①②は『観経疏』散善義にある

一切衆生の身口意業に修する所の解行、必ず真実心の中に作すべきことを明さんと欲す。外に賢善精進の相を現じ内に虚仮を懐くことなかれ。

という文と深い関係があり、③と④は同じく散善義にある「十重厭欣」の説に付合する。

2. 内外相応

至誠心積を見るに、その中心的課題として「内外相応」の問題がある。これは行者の内心と外相に関する事柄であり、これはまた虚仮と真実という形で見る事ができる。

①虚仮

「往生大要鈔」には虚仮について次の如く示してある。

内には愚かにして、外には賢き相を現じ、内には悪のみ造りて、外には善人の相を現じ、内には懈怠にして、外には精進の相を現ずるを、虚仮とは申す也。(同、五四頁)

これを图示すれば

内 愚 悪 懈怠

外 賢 善 精進

となる。「三心義」にも同様、「ほかには賢善精進の相を現じ、うちには愚悪懈怠の心をいだきて」(同、四五五頁)とあり、「大胡太郎実秀へつかはす御返事」にも、

内ニハオロカニシテ、外ニハカシコキ人トオモハレムトフルマヒ、
内ニハ悪ヲツクリテ、外ニハ善人ノヨシヲシメシ、内ニハ懈怠ニ
シテ、外ニハ精進ノ相ヲ現スルヲ、実ナラヌココロトハ申也。

(同、五一六頁)

とほぼ同様のことが示されている。(また「浄土宗略抄」(同、五九

眞実について、それは「本願の功德すなわち正行念佛なり」とし、その典拠として、『観経疏』玄義分の「弘願」についての引文をあげ、^(注)続いて至誠心のこの文(E)をあげる。そして「阿弥陀仏因中眞実心中、作行こそ悪、雑はらざる善なるが故に、眞実というなり。」とし、その義、何をもつて知るのかについて、次の釈の「凡そ施為趣求するところ、またみな眞実」の文をあげる。そして「施す」対象として、罪悪生死の凡夫をあげ、「造悪の凡夫即ちこの眞実によるべき機なり」としている。さらにその理由として、深心第二信法の意、即ち阿弥陀仏四十八願摂受衆生をあげ、凡夫の念仏行の眞実なることは、この阿弥陀仏の本願が眞実であるからであるとしている。

HIJKは身口意三業における欣厭の意を示すものであり、「往生大要抄」には「三界六道の自他の依正をいとひすて、かるしめいやしめんにも、阿弥陀仏の依正二報を礼拝讚嘆憶念せんにも、およそ厭離穢土欣求浄土の三業にわたりて、みな眞実なるべきむね、疏の文につぶさ也。」(昭法全、五七頁)とあり、「三心義」には身口意三業に眞実を用いることをあげ、続いて「すべてこれをいふに、穢土をいとひ浄土をねがひて、もろくの行業を修せんもの、みな眞実をもつとむべし」(同、四五五頁)と示している。「十七条御法語も同じ」同、四七〇頁)、「浄土宗略抄」ではH、Kの文が深心釈において取りあげられているが(同、五九六頁)、至誠心釈には見えない。

三. 法然の至誠心釈

1. 至誠心Ⅱ眞実心

善導は「至誠心」を「眞実心」とされた。法然もこれを継承されている。以下、法然の示すところによって、その内容を考察してみよう。

その眞実といふは、身にふるまひ、口にいひ、心におもはん事、みなま事の心を具すへき也。すなはちうちむなくして、ほかをかざる心のなきをいふ。
〔御消息〕、昭法全五七七頁)

眞実といふは、身にふるまひ、口にいひ、心に思はん事も、うちむなくして、ほかをかざる心なきをいふなり、詮しては、まことに穢土をいとひ浄土をねがひて、外相と内心を相応すへき也。
〔浄土宗略抄〕、同、五九三頁)

眞実トイフハ、ウチニムナシクシテ、外ニハカサルココロナキヲ申也。
〔大胡太郎実秀へつかはす御返事〕、同、五一六頁)
その眞実といふは、内外相応の心なり。身にふるまひ、口にいひ、意におもはんこと、みな人めをかざる事なく、まことをあらはず也。
〔往生大要抄〕、同、五二頁)

外相の善悪をばかへり見ず、世間の謗譽をばわきまへず、内心に

二、疏からの引用^(注3)

法然の『観経疏』からの引用状況を、前の表によって見ると、原文をそのまま引用したもの(○印)と多少の具略はあるが原文に触れたもの、又は抄訳と思われるもの(△印)とを合せると、Aが十四、Cが十三、Dが七、Bが六、Lが五、H I Jが四、E F Kが三、Gが二となる。これらから推察すると、法然の関心の中心はAとCにあったと考えられる。H I J Kは『往生礼讃』の文と類似した面もあるもので、これらに関連するものは『往生礼讃』の文の積とも考えられよう。

次の個々の部分に当ってさらに考察を加えよう。Aについては原文には「至誠心は眞実心なり」とはないが、その語義は「至誠心は眞実心」であるというのと同様であるため、そのように表明したものは△印を付けた。Cは内外相應の問題である。これは法然の至誠心積を考察する重要なものである。これについては後に触れるのでここでは省略する。Dについては、「要義問答」には、外に賢善精進の相を現し、内に虚仮をいなくものは「日夜十二時ニツトメ、オコナフコト、カウヘノ火ヲハラフコトクニスレトモ、往生ヲエストイフ」(昭法全、六二〇頁)とし、「三心義」には「日夜十二時にひまなく、これを行ずれども往生をえず」(同、四五五頁)とほぼ同趣の内容を示している。「七箇条の起請文」には、虚仮心について、「虚仮といふは、貪瞋等の煩惱をおこして正念をうしなふを虚仮心

と積する也。」(同、八〇八頁)と示している。「三心料簡および御法語」では、部分的に原文を引用して、雑毒の善、雑毒の行、雑行などに触れている。Eに関しては、「三部經大意」では読み方が異っている。原文では「施為趣求するところ、また眞実」と読んでいるが、ここでは「所施、趣キ求ルカ為ニ亦皆眞実ナリ」(同、三三三頁)としている。このことについて、藤堂恭俊氏は、前者は浄土宗系、後者は眞宗系の読み方ではないかとしている。前者は「正嘉写本」に、後者は「建長写本」に見られるものである。氏はこの両者が別系統のものであるとし、その理由について、「なぜならば正嘉写本はこれを浄土宗流に『施為趣求スルトコロ』とよんでいるからであり、建長写本のよみ方は、かの親鸞が「愚禿鈔」巻下に「施し玉ふ所をもつて趣求を為せ」とよんでいるのに近いよみを示しているからである。」^(注4)としている。

ところでこの「施為趣求」について、浄土宗では良忠が菩薩の行として、施為は下化衆生、趣求は上求菩提と示している。^(注5)しかし親鸞は先にもあげた如く「施し玉う所をもつて趣求を為せ」と読み、「施し玉う」は阿弥陀仏、「趣求」するのは凡夫であるとす。石井教道氏は深励の解釈に従って次の如く示している。「仏が廻施したまえる大信大行を頂いて、それをもつて趣求、即ち願往生心と為すべきである。已に仏の眞実を凡夫の方に頂いたのであるから、凡夫のそれもみな眞実である。」^(注6)

さて「三心料簡および御法語」(原漢文)(昭法全、四四八頁)にはこの「施為趣求」について、次の如き解釈がなされている。まず

L	K	J	I	H	G	F
不簡内外明闇皆須眞實故名至誠心	不善三業必須眞實心中捨又若起善三業者必須眞實心中作	又眞實心中意業思想觀察憶念役阿彌陀佛及依正二報如現目前又眞實心中意業輕賤厭捨此生死三界等自他依正二報	又眞實心中身業合掌禮敬四事等供養彼阿彌陀佛及依正二報又眞實心中身業輕慢厭捨此生死三界等自他依正二報	眞實心中口業讚歎彼阿彌陀佛及依正二報又眞實心中口業毀厭三界六道等自他依正二報苦惡之事亦讚歎一切衆生三業所爲善若非善業者敬而遠之亦不隨喜也	言自利眞實者復有二種一者眞實心中制捨自他諸惡及穢國等行住坐臥想同一切菩薩制捨諸惡我亦如是也二者眞實心中勤修自他凡聖等善	又眞實有二種一者自利眞實二者利他眞實
○	○	○	○	○	○	○
					○	○
○	△					
○						
		△	△	△		
		△	△	△		
○	○	△	△	△		○
○						

- ① 「凡所施爲趣求」が「凡所施趣キルカ爲ニ」となっている。(昭法全、三三三頁)
- ② 「苦勵身心」から「灸頭然者」までのみ。
- ③ 「凡所施爲趣求」亦皆眞実」のみ。

E	D	C	B	A	区 別
<p>眞實^{ナルニ} 念一刹那三業所修皆是眞實心中作凡所施為趣求亦皆</p> <p>何以故正由彼阿彌陀佛因中行菩薩行時乃至一</p>	<p>然者衆名雜毒之善欲廻此雜毒之行求生彼佛 淨土者此必不可也</p> <p>貪瞋邪偽奸詐百端 惡性難侵事同蛇蝎雖起三業名為雜 毒之善亦名虛假之行不名眞實業也若作如此安心起 行者縱使苦勵身心日夜十二時急走急作如灸頭 然者衆名雜毒之善欲廻此雜毒之行求生彼佛 淨土者此必不可也</p>	<p>不得外現賢善精進之相內懷^中虛假^上</p>	<p>欲明^三一切衆生身口意業所修解行必須眞實心中作^ス</p>	<p>一者至誠心至者眞誠者實</p>	<p>『觀經疏』 散善義 (淨全二一五五頁)</p> <p>遺 文 (語録)</p>
○	○	○	○	○	選択集 (第八章)
○ ^①	○	○	○	○	三部經大意
		○	○	○	三部經釈
	△	△		○	要義問答 (第八)
		○		○	大胡太郎実秀につかわす御返事
		○	○	○	浄土宗略抄
	△	△		△	十七條御法語
	△	△		○	三 心 義
		○	○	○	往生大要鈔
	△	△		○	七箇條の起請文
		△		△	十二箇條の問答
		○	○	○	御 消 息
				△	念仏往生義
○ ^③	○ ^②				三心料簡および御法語
		△		△	觀 經 釈

相ヲ現スルコトヲエサレ、ウチニ虚仮ヲイタケレハナリ」と読んである。）

D、不眞実の行―雜毒の善―虚仮の行についていう。貪瞋煩惱をもった行は、蛇蝎に同じく、雜毒の善、虚仮の行である。このような行は日夜十二時身心苦励しても、雜毒の善であつて、浄土往生は不可能である。

E、浄土往生不可能の理由。それは阿弥陀仏の因中の菩薩行は、眞実心中になされたものであるからであり、施為趣求するところも眞実なるものであるからである。

F、二種の眞実。一つは自利の眞実、他は利他の眞実。

G、GからKまでは自利眞実に関する十重厭欣である。Gはその総体としての止悪と修善をあげる。止悪とは、眞実心中に、自他の諸悪の穢国を制捨し、菩薩の諸悪を制捨する如く自からも止悪に努める。修善とは眞実心中に自他凡聖の善を修すること。

H、口業の欣厭。眞実心中に阿弥陀仏及びその依正二報を讚歎し、三界六道の自他の依正二報を毀厭すること。また衆生の善業を讚歎して非善業を敬遠すること。

I、身業の欣厭。眞実心中に、阿弥陀仏及びその依正二報を合掌敬礼等（四事）し、生死三界の自他の依正二報を輕慢厭捨すること。

J、意業の欣厭。眞実心中に、阿弥陀仏及びその依正二報を思想、觀察、憶念し、この生死三界などの自他の依正二報を輕慢厭捨すること。

K、三業の欣厭。不善の三業は眞実心中に必ず捨てる。もし善の

三業が起れば必ずこれを行う。

L、至誠心の結語。心の内と外（内心と外相）、明るいとき、暗いときを問わず、いつもみな眞実であること、これが至誠心である。

以上、ここでの所説に関する限り、善導の主張する「至誠心||眞実心」とは貪瞋煩惱をもったもの（凡夫）の眞実心ではなく、菩薩の眞実心である如くである。^(注1)（D、E参照）またここには自利の眞実は説かれていても、利他の眞実はあげていない。この点について石井教道氏は「それは要するに自利眞実の内容の外に利他眞実というものがあるのではなく、自利眞実の内容をもって他の人にも教えるのであるから、繁をさけて示されなかつたものである。^(注2)」と示し、続いて記主の「唯自利を釈して利他を知らしむ」の文をあげている。

法然上人の至誠心積について

服部正穩

序

至誠心は『觀經疏』散善義（淨全二ノ五五頁）及び『往生礼讚』前序（淨全四ノ三五四頁）に説かれている。ここではまず『觀經疏』所説の至誠心についての内容を明らかにし、次に語録に見えるその引用状況を考察し、法然の関心がどこにあったかを考察し、さらに語録に見える特異な内容を明らかにし、最後に上人自身の至誠心積を考究することとする。（その中で、上人の至誠心積への過程にも触れることにする。）

上人が『往生礼讚』所説の文を引用しているのは『選択集』（昭法全、三三三三頁）、『浄土宗略要文』（同、四〇二頁）、『往生大要鈔』（和文）（同、五一頁）が全文、『三心義』（同、四五五頁）及び『七条御法語』（同、四七〇頁）には意訳と思われる文が見える。

参考までに『往生礼讚』の文をあげると、次の如くである。

至誠心所レ謂、身業ニ礼ニ拜シ彼ノ仏ヲ、口業ニ讚ニ歎シ称ニ揚シ彼ノ
仏ヲ、意業ニ專ニ念シ觀ニ察ス彼ノ仏ヲ、凡ソ起スニ三業ヲ必ス須ク眞
実ナル故ニ名ク至誠心ト

一、疏の内容

至誠心とは眞実心である。これがここでの基本テーマとなっており、その眞実心をもって身口意三業の行を修することがその中心課題となっている。まずここでは善導の至誠心義の内容を整理することとする。

A、至誠心とは眞実心である。

B、至誠心は必須の要法である。

C、内外の相について、外に賢善精進の相を表わし、内心に虚仮を懐いてはならない。（親鸞は『唯信鈔文意』で「外に賢善精進ノ